



「福澤育林友の会」ニュース

第29号 発行日2016年1月10日

福澤育林友の会
東京都港区三田2-15-45 慶應義塾 管財部
TEL: 03-5427-1050 FAX: 03-5427-1190
<http://www.f-ikurin.jp>



「年頭にあたって」

福澤育林友の会
会長 渡部 直樹
(慶應義塾常任理事)



2016年の年頭にあたり、新年のご挨拶を申し上げますとともに、昨年中の福澤育林友の会の皆様のご支援に感謝いたします。お陰を持ちまして、義塾は自然や環境に関わる教育・研究を着実に進めることができました。

一昨年、林業に従事しようとする若者を描いた「WOOD JOB! 神去なあなあ日常」この映画のロケ地が速水亨さん(本会員・林業三田会員)の森であったことは後で知りました。が上映され、若い人にも大きな話題になりました。自然や地球環境への関心の世界的高まりにより、昨年12月にCOP21パリ協定が締結されましたが、この映画の上映は、このようなグローバルな流れの影響を受けて実現されたのかもしれませんが、しかし、それと同時に、こ

の映画が取り上げられたのは、自然と暮らす生き方、さらに自然を相手にするビジネスである山の仕事 = 林業に対し、多くの現代人が憧れを抱いていることの表れであるとも思われます。

しかし、ビジネスとしての林業の難しさ、その問題点については、林業三田会の皆さんをはじめ多くの方々から指摘されています。それは、木材需要ならびに価格の不安定さ、木材の生産・加工コストの高騰と相対的な木材生産の付加価値の少なさ等々、もありますが、とくに、皆さんがそろっておっしゃることは、森林保全(=いかに森を守るか)こそが何よりも重要な問題ということでした。多くの時間と労力をかけて木を育て、それを伐採し市場に出荷した後は、森の持続性を確保するために再造林をすることが、すぐ必要となります。まさに林業は、循環型の産業の典型と言えます。

2017年度末には、慶應義塾高等学校の開設70年記念事業の一環として新教育棟の竣工が予定されています。その建築資材の一部として、南三陸森林組合の佐藤久一郎さんたちのご尽力で、志津川・慶應の森の木材を使用する計画が進んでいます。慶應の森の木に囲まれて青春を過ごす塾高生の姿を想像するだけで、嬉しくなります。何よりも素晴らしい自然・環境教育となると思います。

今年、平成 27 年度の研修旅行は九州の大分を巡るものでした。

一日目の 9 月 26 日は福岡空港に集合して、バスで日本三大美林のまちとして知られる日田市の中津江村に入り、鯛生金山を經由して田島山業の経営する山林を訪ねました。最新の林業機械による造材作業や早生樹の試験植林などを見せていただきましたが、地域産材活用と持続的森林経営に挑戦する塾員、田島社長の姿を心から頼もしく、また誇らしく思いました。



二日目は福澤先生の故郷である中津市を訪れましたが、黒田官兵衛ゆかりの中津城は観光客で混み合っていました。NHK の大河ドラマ「軍師官兵衛」人気で、中津市を訪れる観光客が三倍に増えたということです。お城を見た後、福澤先生が幼少年期を過ごした福澤旧居と、それに隣接する福澤記念館に入りましたが、中津城から流れてくる観光客も多く、ここも人でいっぱいでした。旧居を見学していた時、すっかり忘れていた「慶應義塾創立 150 年記念」植樹の記憶がふとよみがえりました。

記念植樹は平成 20 年 6 月 1 日に行われました。あのとき植えた苗木はどうなっているのだろうか。急いで庭に出て見ると、そこには大きく成長した夏みかんの木が、黄色い実をたくさんつけ、強い日差しを受けて輝いていました。七年の歳月を経て小さな苗木が立派に育った姿に少し感動を覚えました。植樹になぜ夏みかんの木が使われたのかは分かりませんが、友人から贈られた萩の夏みかんを用いて日本で最初にマーマレードを作ったのは福澤先生ですから、記念樹として相応しい木と言えるかも知れません。



ともあれ、慶應義塾創立 150 年記念を祝う福澤旧居での植樹は、耶馬溪の自然環境と景観を守ろうとした福澤先生の森林を愛する精神につながるものであり、また、その先生の精神を受け継いで日本の林業の可能性を追い求める林業家が九州にもいたことを知り、今回の研修旅行も楽しく有意義であったと思います。

お世話下さいました関係者の皆様、本当に有難うございました。

「大分を訪ねる旅」に参加して

池田 良子
(1964年文卒)

平成27年9月に「大分を訪ねる旅」に参加させて頂きました。

友の会の旅行では、大分昔に白山から高山に抜ける旅に参加しました。その時苗木を各自植えたのですが、時々「あの木はどうなったかな!」なんて思い出すことがあります。そして今回は田島山業の見学を通して、日本の林業のあり方や問題点、そして環境問題について、もっと深く考えさせられる旅になりました。

塾出身の女友達4人を誘い、5人で全行程を大いに楽しませて頂きました。

26日午前11時前に福岡空港を出発。山の中、山の中へと入って行きました。普通の観光地では行くことのないルートに行くと言う旅は、何時でもわくわくするものです。



中央筆者



田島山業の田島社長(塾員)から色々のご説明を受けながら現場に到着。まずハーヴェスターと言うクレーンの様な大きな機械で立木の伐倒、枝払い、集積等、目の前のすさまじい音と振動の光景に一同圧倒され、ただ「ワッ!すごい!何!これっ!」と感嘆の声が相次ぎました。



現場に着くまでは、林業と言うと、昔から作業員達が斧で木を伐り倒し、それを手やワイヤーで引いて運ぶと言った光景をすぐに想像してしまいます。しかし、今、目の前で行われている作業は全く異なるものでした。機械を使いこなし、完全に省エネ体制で、伐採、枝打ち、運搬が行われる新しい林業のあり方でした。そして、それに携わる作業員は皆、若者。作業服に身をつつんだ女性も加わっていました。

林業は百年単位で先を見据える産業。しかし、田島山業では早生樹を育てようと試験植栽をしています。その植栽地も見せて頂きました。ここから新しい林業のシステムが発展し、林業の未来が開けることを祈らずにはられません。

最後に福澤先生の生誕の地、中津を訪れました。卒業後50年以上経って、初めて塾の聖地を訪れることができ、大感激の旅でした。





志津川山林の国際森林認証(FSC 認証)の共同取得を目指して、平成 27 年 5 月に南三陸森林管理協議会が設立されました。塾員・佐藤久一郎氏(南三陸森林組合代表理事組合長)を会長として、構成員は南三陸町内に山林を所有する南三陸町、地元の 2 林業家[(株)佐久・大長林業]、慶應義塾の 4 団体で、これまで取得に向けて準備を進めてきました。事前審査や本審査(現場審査、森林経営計画書等の書類審査を含む)を経て、ようやく同年 10 月 7 日付で、



宮城県内では初めて待望の認証を受けました(平成 27 年 10 月 7 日から平成 32 年 10 月 6 日までの 5 年間)。

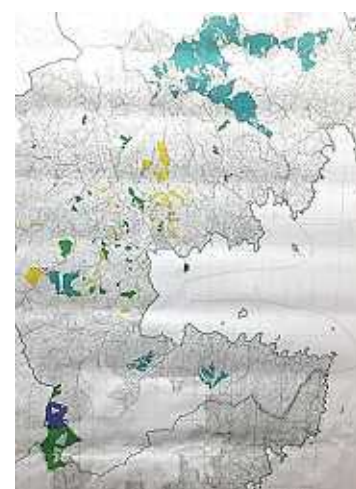
これはドイツに本部を置く国際機関の FSC「森林管理協議会」から、適切な管理で環境保全に寄与し、経済的にも持続可能な森林として選ばれたこととなります(対象森林面積は、義塾が所有する山林の約 64ha ほかに町有林を含む計 1,314ha)。[右下写真・色付部]



-志津川山林-

同年 11 月 2 日、南三陸町役場にて森林認証伝達式が行われ、テレビ、新聞社などの多くのメディアが同席する中、FSC ジャパン議長・太田猛彦氏(東京大学名誉教授)より、構成員を代表する南三陸町長・佐藤仁氏に認証状が手渡されました。

南三陸杉を主とする木材の認証取得によって、今後内外へ向けてブランド力を発信し、適切な森林管理の向上に共に協力していきます。一方、これまで先輩方が義塾の将来に思いを馳せながら植林し、育ててきた木材の塾内での利活用も検討されるものです。



-南三陸町内の認証林-

【事務局よりお知らせ】

次回の「第 15 回 森を愛する人々の集い」は平成 28 年 6 月頃に開催する予定ですが、当日は併せて本会「総会」を開催する計画をしております。詳細につきましては後日お知らせをお送りしますので、よろしくお願い申し上げます。